

保育者の働きかけと子供の姿の変容

——保育にとって「指導」は必要か——

東 喜代雄

はじめに

先に開かれた第四十二回日本保育学会（於・十文字学園女子短期大学）における自主シンポジウムにおいて、私は次のようなテーマを掲げて企画者になった。

保育者の働きかけと子どもの姿の変容

——保育にとって「指導」は必要か——

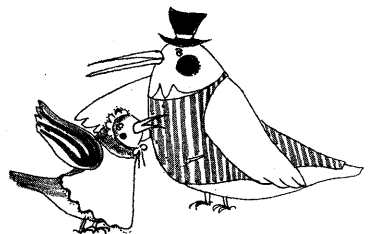
日本保育学会の歴史の中で、現場の保育者が企画者になったのは初めてのケースではないかと思うが、ひとりの現場人として副題にある「指導」とは何か、その内実をどうしても知りたい欲求があったのである。

保育者が集まるとふたこと目にはこの用語が顔を出し、

研究会や研修会にいつても、現場の保育者から話題にのぼるのは、「どんな働きかけをしたらよいか」「どんな言葉かけが適切か」「導入はどうするか」のたぐいである。

しかしほとんどの教育事典や関係図書にその定義や解釈を見つけることはできない。

またいくらか記事や解説があるにしても、記者によってそのニュアンスは微妙に違っている。だからその使い方、使われ方は、使う人によって十人十色である。



いては、こういう意味において使う…」という説明をい
ちいちつけ加える。

保育の現場には、「指導」について天と地ほど違う
考え方がまかり通っている。やたらに子どもをひっぱり
まわし、強圧的な訓練色の強い教師主導の管理的保育か
ら、子どもの自主性を尊重するといいつつも、保育の方
向性もカリキュラムもない放任的な保育までである。後
者はあるいは指導とは呼ばないにしても、子どもたちと
話しあいながら、彼らに考えさせ、方向づけをしたり、
援助したりしていく保育観に立った保育もある。

つまり指導という一つの概念の中に二つの意味、しか
も全く対立的な意味が共存しているわけである。これが
保育の研究と実践を進める上でまことに紛らわしく、か
つ混乱を引き起こしている原因ではないかと思うのであ
る。

また私自身今回のシンポジウムのために調べているう
ちに気付いたことであるが、今日指導の概念がはつきり
しない、人によって使い方に違いがあるといっても、そ

れでも二十年前、あるいは戦前の考え方とはまたいくら
か違っていることがわかった。

いずれにしても、指導ということばは、現場で頻繁に
使われている割には、いっこうに要領を得ず、まことに
曖昧であるといわねばならない。

それにつけても、副題のつけかたについて疑問を抱く
人があるかもしれない。どうして「指導は必要か」なの
か。保育に指導が必要なのは当然と思う人であればあた
り前の疑問であろう。そんな人々には、あるいは「指導
は、どこまで必要か」とした方がよかったかもしれない。

しかしここでは指導について、根源的な本質まで追求
したいという欲求があつて、完璧なまでに指導を透明視
したところから、討論を始めたかと思つていたのであ
る。

おりしも二十五年ぶりに幼稚園教育要領が改訂され、

先に告示された。

新教育要領は幼児を園の主体者と位置づけ、彼らの自
発的、主体的な活動によって、幼児期にふさわしい生活

が楽しく展開するように——とうたっている。この考え方は、当然のように保育における指導のあり方をも改変した。

「指導」という用語が現行の要領と比べると激減しているが、それもひとつの表れかもしれない。

もちろん第一章総則のうち「幼稚園教育の基本」には「幼児一人一人の特性を生かし発達の課題に即した指導を行うようにすること」とあるし、第二章ねらい及び内容には、各領域ごとに「指導の内容」を挙げている。さらに第三章では「指導計画作成上の留意事項」として、ずばりと指導計画や指導計画作成に言及している。

従って今さら「指導は必要か」などといっているのはいられないのかもしれない。しかしまた、このような画期的な時代背景をもつからこそ、指導とは何かを追求したいわけでもあった。

あるいは哲学者たちがするように、そのことばの意味を追求することによって、その周辺にある「保育とは何か」「保育者とは何か」が明らかになるのではないか、

さらに「人間とは」「発達とは」「環境とは」というところまでわかるようになるのではないか、と期待したのである。

さて指導を考えると、私の脳裏をかすめる事例がある。二人の男児をもつ母親が上野動物園に行ったときの話である。

金ヒマかけて上野まで行った母親はこの時とはかりパンダをはじめあれこれ動物を見せてやりたいと思った。しかし二人の息子は入口の大木の根っこにしゃがみこんで動こうともしない。アリの行列に魅入っていたからである。

「なにぐずぐずしてるの？ 早くおいで。パンダはこっち、水族館はあっちよ」

帰ってきた母親はそんな態度をしきりに反省した。「私がすべきことは子どもと一緒にアリの巣穴のところにとたずみ子どもたちと感動を共にすることであった」と——。

また一人の短大生が「どうして保育者になりたいか」と話してくれたことがある。幼稚園の遠足の翌日にみんなは一斉に木の絵を描かされた。彼女は白い紙にうすい緑色で一本の木を描いて提出すると、教師は「ずいぶん淋しい木ね。まだ時間があるから、ちゃんとバックも描いたら。」と言った。彼女はどのようにバックが要るのかと迷ったが、先生が言うのだから間違いないだろうと思ひもう一度席につき、その木に数個のハンドバッグをぶらさげて描き、提出した。

すると教師は笑いころげ、みんなに見せてさらしものにした。そのとき四歳の彼女は「人の失敗、思い違いをあざ笑い、人に見せびらかして笑いものにするような、そんな教師でなく、失敗せざるを得なかった子どもの気持ちのわかる教師になりたい」と思ったというのである。

今日指導と称して、子どもの気持ちに心を向けようともせず、自分の計画ばかりを親切げに押しつける保育者が何と多いことであろう。

話題提供者の岡本富郎氏（白梅学園短大）は発表の資料に「教育学」*Pädagogik*（独）*Pedagogy*（英）はギリシャ語の *Pais*（子ども）*ago*（連れ添う、導く）から来ているとして「教育は子どもに連れ添うこと」であると教えてくださった。

私は学級担任をやって、二十年余りの教員生活によりわかったことは、基本的には「子どもには教えられない」とはあっても、彼らに教えること（もの）は何もない」である。

私の知識、私の経験、技量、価値観……それらはいったい何だろう。しばしば人をつまづかせ不自信を抱かせ、自己嫌悪にさいなまれ、落胆し続けているのではない。私は取るに足りないあわれな一人の罪人に過ぎない。

しかしまた「保育や教育は文化への共同参加である」ともいわれる。上から一方的に知識や技能を伝達するだけが役目ではなく、自分自身が文化にふれる楽しみや喜

びを実感し、みずからの感性を磨きつつ、ひとりの人間としての生きざまや文化とのかかわり方を子どもたちからだと伝える、ともに楽しむ…それらも指導といえはばいえるのではないか。

さらに「子どもを守る」ことも実際にはできる。あらゆる外部からの抑圧や攻撃に対して、彼らの気持ちを理解し代弁してやることもできる。社会や時代の波に向かって幼な子の楯になることができるのである。

これは同時に子どもたちに向かって、社会やおとなの世界を代弁するという作用を担うわけであるが、そういう中間的な双方の役割を保育者は運命的に背負っている。

そういう視点でいえば、やはり幼児の目線では見ることもできない社会や世間一般の規範や文化を共に考え、紹介し、さし示す…それも指導の範疇にあるといえるだろう。

辞書によると、指導とは「目的に向かって教え導くこと」「ゆびさし導くこと、教え導くこと…児童、生徒を

生活に適應させ、望ましい發展を可能にするための教育活動。職業、進学、健康指導などを含む」（広辞苑）とあり、それは「ある目的に向かった非常に強い意図、刺激、行為」を含んだ概念であることがわかる。

私は一つの目的に向かって極力子どもを引っぱっていくほど立派ではないし、子どももまた引っぱっていかれなければならないほど愚かではないことは先にも述べた。

しかし現実には、保育者の存在は強い影響力をもつ。そこに立っている、見ていただけで働きかけることになり、話しかける、一緒にするとなればなおさらである。

園には基本方針や指導計画があるが、いかにすぐれたカリキュラムがあっても、その効果を最終的に決定するのは、それぞれの保育者の信念や考え方であるとする研究もある。

そんなことを考えていると、「指導」という言葉はあまりにも固く、私の心情にはそぐわない。保育とは言ってもなく子どもの善さを見つけ出し、やわらかな働き

かけを通してはぐくみ育てる営みであるからである。

そんな私の悩みに答えてくれたのが、シンポジウムの席上語られた下山田裕彦氏（静岡大学）の『みにくいアヒルの子』につながる一連の発表である。

氏はアンデルセンの童話を引用して「変容」の意味を語ってくださった。

「いなかはどこも素晴らしい景色でした」で始まる前半は、みにくいアヒルの子が差別され、追ひ払われる。アヒルの仲間ばかりでなく、ニワトリからも噛みつかれ、つかれ、馬鹿にされる。やり場のない悲しみの中で、「これも僕がみにくいからなんだ」とこぼすアヒルの子の苦悩と絶望が痛い。

このアヒルを待っていたもう一つの悲しみは、厳しい冬をどう乗り切るかという問題であった。

アンデルセンは「この厳しい冬の間、アヒルの子が堪え忍ばなければならなかった苦しみや悲しみを、残らずお話しすることは、あまりにも悲しいことではないで

しょうか。」と書いている。

冬が過ぎ春がやってくると状況が一変する。美しい三羽の白鳥たちを見ていたアヒルの子の独白の部分、

「あの立派な堂々とした鳥のところへ飛んでいこう。だけどこんなみにくい僕みたいな者が遠慮なく近づいて行ったら、殺されてしまうかもしれない。でも構わない。寒い冬じゅうひどい目にあったりするよりは、いくりましたかしれやしない！」

アヒルの子が近づくと、白鳥たちは羽をなびかせて近づいてきた。

「さあ僕を殺してください」そう言って頭を水の上にとらして死を待っていると、水の面に映ったのは、あの不格好な灰色のみんなに嫌われたみにくいアヒルの子ではなく、一羽の立派な白鳥であったというのである。

新約聖書マタイ伝十七章に記されている、三人の弟子の前でイエスの姿が変貌したという、あのメタモルフォーゼの記事を連想させる場面である。

みにくいアヒルの子の次の言葉は、感銘深い。

「いままで堪え忍んできた様々の悲しみや苦しみを思うにつけ、今の自分を心から嬉しく思いました。今こそ自分の幸福を、そして自分を迎えてくれたあらゆる喜びを、はつきり知ることができました。」

子どもは美しいもの、高いもの、優れたものにあこがれる人間性の持ち主である。我々はみにくいものを日々洗い落しながら、自分を変容させていくという課題を背負っている。とりわけ保育者、教育者と呼ばれる者は、厳しく自分を変えていくことが期待されるのではないか。

林竹二氏（宮城教育大学長）がさまざまな教育実践の最後に到達した結論は、

「切り捨てられた子は教師や学校に徹底的に不信をもっている。その不信を『荒れる』という行動で現す。子どもを荒れさせているものは何であるかということ、を、一生懸命つかもうとする努力を通して教師は変わってゆき成長する。教師がみずから変わってゆくことによってしか子どもは変わらない。」

教師が子どもから学んで自分を変える、それによって

子どもが変わる。これが私は教育だと思っている。」と
言っている。

下山田氏はしめくくりとして、

「子どもの主人公は子ども自身である。指導と称して主人公である子どもの座をおびやかし、奪うことは、保育者には許されていない。自分を変えつつ、やわらかい営み働きかけをするとともに保育の営みは成立する」として、「指導」という言葉に代わるものとして「働きかけ」という言葉を使ったらどうかという提案があった。

シンポジウムは二時間三十分にとわった。ほかにも多種多様な発表があったのは当然である。その内容は『保育専科』（フレーベル館）九月号をみていただくとして、私にとって今年の学会が大きな示唆を与えてくれたのは事実である。読者のみなさんのご教示を期待していません。

*注 『林竹二集』第九巻 一七九ページ

（狭山ひかり幼稚園）